



今年の夏休み

都地伸 一*

暑い夏休みでした。久しぶりに、一夏まるまる日本にいたのです。昨年と一昨年は韓国に行っていたから、ずい分、過ごし易かったです。

韓国で何をしていたのかって？ 勿論、避暑のためではありません。それほど、良い身分ではありませんし、ヨーロッパの習慣を取り入れているわけでもありません。では、当時、盛んだったキーセンパーティかと言われそうです。しかし、僕はまだ学生です。金もないし、第一、大人の人達が目的とするお遊びを固く禁じている宗教、そう、キリスト教の一信者なのです。へんな気を起こすはずもないまじめな青年です。

では、何用あって、海を渡る？ 実は、日本と韓国の学生が共に生活して、農村のお手伝いをしようという趣旨で開かれた「日韓学生サマーカーンプ」に参加するためだったのです。約2週間、ビザの許す範囲ギリギリまでいたわけです。

一昨年は、日本文化の発祥の地、百済の都、扶餘(プヨ)に行きました。そして、昨年は、扶餘の町を流れる白馬江の上流、錦山と言う高麗人蔘の産地に行き、わずかですが、お手伝いをさせていただきました。

扶餘は、日本書紀にも詳しく出ていますが、日本が建国される前後、文化文物を取り入れた百済の首都で、1200年前、既に60万の人口をかかえた世界的都市でした。この扶餘も、新羅と唐の軍隊によって、あえない最期をとげるわけですが、この陥落の前、日本では、時の女帝、斉明天皇が都をわざわざ奈良から九州、太宰府に移して支援しています。建国まもない日本ですが、全国から舟、600隻を結集して、韓国の

西海岸へと向かわせているのです。

しかし、この百済支援の日本軍も巧みな唐の計略によって、白村江(現在の白馬江)の下流で全滅して、百済支援の夢がといえ去ったのです。日本軍来たるの報を受け、再度、立ち上がった百済軍も白村江での日本軍全滅の知らせを聞いて戦意を失い、戦況を盛り返すことができず、ついに滅亡への道をたどることになります。

今、見る白村江は、満々と水をたたえ、河原の砂も海岸のもののようにこまかく、泳ぐために田舎道を通って川原に立つと、はるか向こうにお百姓さんが川から水を汲んで畑に運んだりしている対岸が見え、日本では見ることができないくらいゆったりとしています。往時の戦いの場所は、扶餘の町よりはるか下流だとのことで、行ってみはしませんでしたが、その頃の様子が目に見えようように広々としている川でした。

百済が盛っていた頃、日本から来た使いの者は川をさかのぼり、扶餘の町にはいったと言われていました。あるいは、百済の学者が文物をたずさえて出発したのもこの川からでした。王仁が千字文を伝え、瓦博士が飛鳥寺の瓦を作るため渡海し、百済と日本は玄海灘を越えて一つに結びつけていました。日本の文化的向上のため、百済のこれらの人々が大きな働きをしたことは、日本書紀を見れば、よりはっきりとするでしょう。

つい、最近、日韓の学者が協力して、古代使われたと思われる船——古代船——を建造して、玄海灘を渡れるか否かの実験がなされましたが、日韓の協力は実にほほえましく、本来あるべき姿を見る思いがしました。

テレビでは、その航海の模様が放映されていましたが、何人もの漕手が一生懸命漕いでいる

* 都地伸一 (Shinichi Tsuji), 大阪大学部, 機械工学科, 4年次

にもかかわらず、船は遅々として進みません。おまけに、釜山から出発した船が、予定のコースから大きく東にずれてしまうのです。釜山近くの洛東江の水の勢いが強く、流されるとのこと。古代においては、勿論、釜山は開かれておらず、別の港が使われたでしょうが、これと同じことが繰り返えされたに違いありません。今でこそ、7時間もあれば、釜山から下関まで来れるのに、古代船では、約1カ月はかかるということが判明したそうです。造船技術の発達がどれほど、人間に便利さを与えるかを実感する思いでテレビを見ておりました。

と同時に、現代に欠けているものをも考えざるを得ませんでした。往時は、かくまで距離が離れていたにもかかわらず、韓国人と日本人とは通訳なしで通じたと言われます。現代は、距離においても、くらべものにならないくらい近くなったと言うのに、果してどれだけ心情的に、そして国家的関係において近づいたかということでもあります。戦前の40年あまりの植民地時代は、勿論、例外にしても、今日、様々な問題が起こっても韓国の人々の気持を理解せず、日本人的思考、感覚で物を言っている場合があまりにも多いように感じられます。

北と南において、違ったイデオロギーで国を作っているわけだから、ずい分と複雑なお家の状態だけでも、もう少し、配慮が欲しいと感じられます。何しろ、韓国人は日本人と違って、とても男性的だし、自尊心が強いのです。見くびった態度をとられ、怒らないのは、女性化した日本人ぐらいのもので、顔つきからして男性的な韓国人は猛烈に怒り、そして、なかなか、その怒りが消えないのです。

向こうの女性でも男性でも、(僕が話したのは、女子大学生が多かったが)日本人という良く言わないのです。かわいい顔をしたその奥底に、日本人に虐待されたくやしさが今だに宿っており、日本人は嫌いだとはっきり言うのです。戦前やられたことを子孫代々、教育しているように思えて、ゾッとしました。朴大統領は政令によって、日本の過去のことを許そうと呼

びかけているそうですが、大衆の意識の根底には、まだまだ、日本への敵対意識が根強く残っているのです。

一旦、植えつけた感情は、なかなか抜きとれるものではないのですから、少しでもそれを柔らげるようにしなければならないと感じます。それにつけても、扶餘の町の国立博物館の館長さんの李夕湖先生のお話が身にしみています。

「人間が一番苦しい時に助けてもらったことを一生忘れない。と同じように、国においても苦境において助けられると永遠に忘れられない。百済滅亡の時、建国まもない日本が、都を移してまでも救援軍を送ったことを今でも恩として感じる。」このお話をうかがった時、1200年前のことを今でも覚えて身にしみ感じていたならば、今そうしたら、どれほど日韓が一つになるかと思ったのです。

サマーワークキャンプでは、日韓の学生が一つになって道路修理の奉仕活動をし、中学校の体育館で村民と一緒に交歓の夕べを持ちましたが、まだまだこのぐらいの活動では、大海に投げた小石ほどの効果もないでしょう。

政治的には、あれから金大中氏事件やら、朴大統領夫人狙撃事件やらで日韓関係は、だんだんむつかしい状態に陥っていきましたが、そのような感情的しこりを吹き飛ばすような大事件、つまり、インドシナの共産革命が勃発したためか、最近は少しずつ歩みよりを見せているようで良いことだと思っています。昔から、日本と韓国は夫婦みたいに協力して来たのですから、これからも我々が先頭に立って交流して行きたいと思います。

昨年のワークキャンプから、1年が経過しました。夏休みには、コスモスの花咲く涼しい韓国に行くものと勝手に体が思い込んだためか、今年はいろいろ忙しくて行けなかったら、大阪の暑さには、ほとんど閉口しました。

古代の渡来人も、きっと、そう思って、故郷のコスモスが風にゆらぐ姿を思い起こしたことでしょう。